

おわりに

Special Feature / Beyond ON-OFF Conclusion

「本暇」的時間を生きるために

これまでさまざまな余暇の形、時間の活用法を見てきた。

余暇の楽しみかたから、時間と場所を人とシェアする活動、

自分のための自由になる時間の作りかた……

こうした事例と知見を、いかにして個々の人生に活かすことができるか。

編集部としての提案をまとめた。

本暇的時間を支える 4つの相乗効果

——シナジー

本特集「余暇から本暇へ」の各記事を通観するなかで、我々は全体に共通するひとつの可能性を見出した。それは、社会的な役割を果たすことで楽しみを得る、あるいは自分のしたいことをしながらその楽しみを社会に還元できる、そのような状態が、従来の余暇（「仕事以外の余った時間」という概念を超えた、「本暇」的時間と言えるのでは、ということである。言い換えるならば、本暇的時間のひとつのありかたは、社会的な役割と自分のしたいことから得られる満足が、 balan

スよく融合した状態、という可能性である。

それは、公と私の相乗効果が得られた状態とも言えるが、各記事をもとにさらに詳しく検討・整理していくと、そのシナジーには、大きく分けて次の4つのパターンがあるように思われた。

相乗効果

一、 時間を 軸にした シナジー

仕事（＝公の時間）と個人（＝私の時間）のシナジーである。公・私の時間、双方が充実すれば両方がうまく回るようになる。この実現のためには、一種の「チーム・アクション」による働きかたが有効と思われる。小室淑恵氏の論考「チーム力で時間を生み出そう」に書かれている、「仕事の時間⇨ワー

ク」をチームでシェアすることで「自分の時間⇨ライフ」を創り出すというワーク・ライフバランスの実現方法は、今後の働きかたを考えるうえで重要な指針である。

相乗効果

二、 能力(技能)を 軸にした シナジー

収入を得ること（＝公のために能力を使うこと）と、生きがい（＝個人のために能力を使うこと）のシナジーである。本暇的時間は、場合によっては金銭を超えた相互扶助によってもたらされることも多い。このことは、「職業を通じて培ったスキルや知識」（『プロボノ』嵯峨生馬著、勁草書房、25頁）を社会に還元していく「プロボノ」などの例に見られる。金銭とは異なる価

1 セネカ著 大西英文訳
『生の短さについて
他二篇』
岩波文庫、2010年

冒頭でいきなり「われわれが享ける生が短いのではなく、われわれ自身が生を短くする」と言われると、実に耳が痛い。では、与えられた時間を十分に生かすにはどうすればよいか。知らず知らずに多くのことに忙殺され、時間を失っている現代人必読の「気づき」の書。

2 ハンナ・アレント著
志水速雄訳
『人間の条件』
ちくま学芸文庫、1994年

「労働」「仕事」「活動」に分類できる人間の活動的生活のうち、近代、生命を維持するためだけの「労働」が優位になり全体主義にもつながったと論じた公共哲学の古典。ともすれば「労働」第一になりがちな現代で必要とされる一冊と言える。

3 國分功一郎著
『暇と退屈の倫理学』
朝日出版社、2011年

物質的には満たされたかに思える我々だが、本当に豊かな生を生きているのだろうか？ 余暇を過ごしなが、倦怠と虚無にさいなまれてはいないだろうか？ 「暇」や「退屈」という日常的概念を、哲学的見地から徹底的に掘り下げ、ひいては「生きる意味」の深淵にまで迫った、画期的余暇論。

4 内山節著
『時間についての十二章
——哲学における時間の
問題』
岩波人文書セレクション、2011年

山里や森から時間を見なおすと、効率や合理性を重視する近代的時間観とは異なる「関係的時間」が見えてくる。近代的時間観から解放され、多様な時間のありかたを認識することで確立される人間の自由。本書では、そんな自由を生きたさまざまな人に出会えるのも楽しい。

5 西村佳哲著
『自分の仕事をつくる』
ちくま文庫、2009年

「働き方研究者」が、モノづくり分野を中心に、活躍中の人や職場を訪ねてインタビューする。「いいモノを作っている人は、働き方からして違う」という著者。自分の働きかた、ライフスタイルを考え直したい人すべてにとって示唆に富む一冊。

相乗効果

三、 空間を 軸にした シナジー

値にやりがいや生きがいを感じる生きかたが、すでにいろいろなところで始まっているのである。相手のためになることで、金銭に還元できない「幸せ」を得る人が増えているとも言える。

アサダワタル氏の実践に見られるように、自分の居場所を確保しつつその場所を共有できる場にしたたり、「第三の場所」を作った過ごしたりというシ

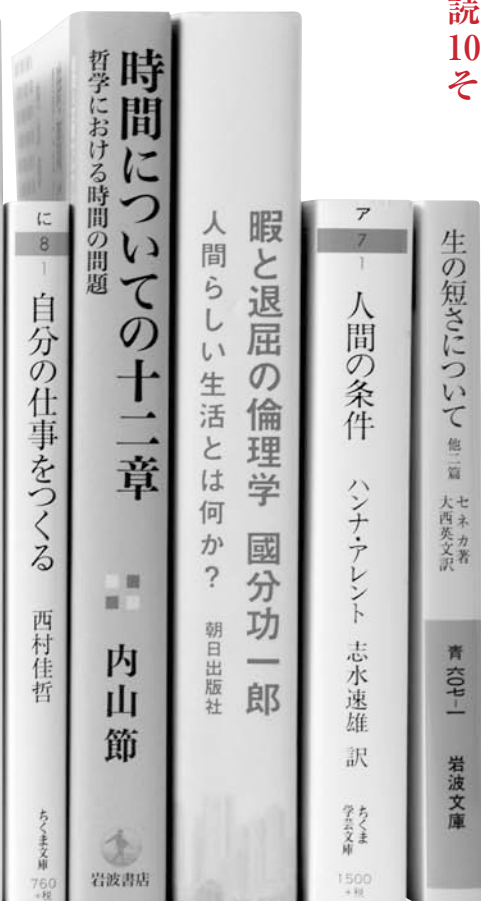
ナジーもありうる。ここで言う第三の場所とは、プライベート（＝第一の場所）とパブリック（＝第二の場所）との区別を完全になくすわけではなく、ゆるやかに接合していくものである。プロボノ活動も積極的にやっているプロプログラマーのイケダハヤト氏は、著書『年収150万円が僕らは自由に生きていく』（星海社新書）のなかで「これからはそれら（編集部注…家族と社会のこと）に加えて第三、第四、第五の居場所として、自由度高く関われるコミュニティにも所属していくように変

化していく」（61頁）と指摘している。第三の場所の特徴は、イケダ氏の指摘の通り、会社や家族というコミュニティとは異なり、自由度が高いことである。現在の多くの会社に見られるような、他の人が会社に残っているから残業する、皆で一斉に働くというところが重要である。

第三の場所を自分なりに探してみるという試みも重要である。「池袋コミユニティ・カレッジ」のようなカルチャー・センターも、瀬戸内国際芸術祭

余暇を 読むための 10冊 その1

私たちは平準化された
時間秩序のなかに
身を置いていても、
ときどきその時間世界から
飛翔するのである。
——内山節



阪神・淡路大震災を契機に、人と人とのつながり＝コミュニティに、現代社会が抱える諸問題を解決する力を見出した著者が、これまでに関わったさまざまな事例を紹介する。モノを作るだけでは解決できないことがいかに多いかが明らかにされる。

6 山崎亮著
『コミュニティ
デザイン——人が
つながるしくみをつくる』
学芸出版社、2011年

1年間お金を使わずに半自給自足の実験生活を行った青年は、「フリーエコノミー」な生活に不可欠なことは、サバイバルのための技術ではなく、人生を信じ、人と人が自ら与え合うことで生まれる有機的な循環であると語る。「お金かコミュニティか」を問う一冊。

7 マーク・ボイル著
吉田奈緒子訳
『ぼくはお金を使わずに
生きることにした』
紀伊國屋書店、2011年

気鋭の思想家が抱腹絶倒の対談で導き出す、現代の贈与論。そのキーワードは、「情けは人のためならず」。貨幣、情報、サービス、評価という経済本義のあれこれを、“与える”という視点で捉え直し、全く新しい「交易」と「共同体」のありかたを浮かび上がらせた。

8 内田樹・岡田斗司夫著
『評価と贈与の経済学』
徳間ポケット、2013年

池内流「第三の場所」、居酒屋の楽しみを語り尽くした小粋なエッセイ集。自分のなじみの店を持つことは、人生を豊かにするためには欠かせないことである。この本に出てくるような「おなじみさん」になることにあこがれて、今日も居酒屋を訪れる。

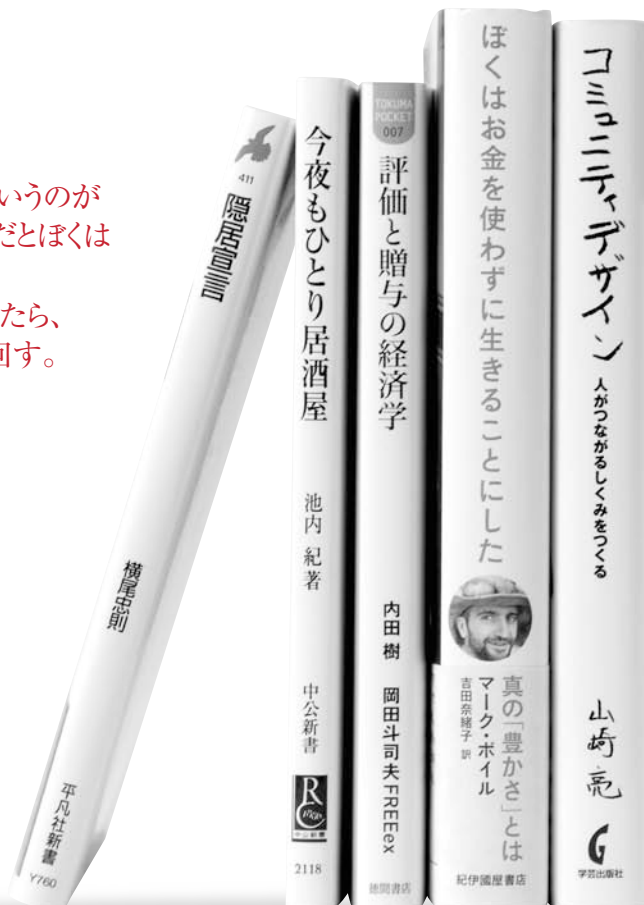
9 池内紀著
『今夜もひとり居酒屋』
中公新書、2011年

多忙を極めたグラフィックデザインの仕事に70歳で区切りをつけ、「隠居」宣言をした著者。世間の時間を無視して自分の時間を生きるなかで得た体験をもとに、108の質問に答える形で隠居生活の有様について説く。明日のことは考えず、今日の風に乗るのが隠居流。

10 横尾忠則著
『隠居宣言』
平凡社新書、2008年

余暇を 読むための 10冊 その2

「良きパッサーたれ」というのが
社会人の重要な条件だとぼくは
思うんです。
とにかくパスを受けたら、
ワンタッチで次へ回す。
——内田 樹



で活躍する「こえび隊」のようなボランティア組織も、第三の場所として機能している面が大いにあるのではないだろうか。

相乗効果

四、

楽しむことを 軸にした シナジー

個人的な楽しみを社会的な役割とし

て還元していくというシナジーの方向性もありうる。仕事と余暇の融合と口で言うのは簡単だが、自分の時間の作りやすさは、職業によっても、年齢によっても異なる。それぞれの立場に合った本暇の時間の確立法を探る必要がある。

冒頭に述べたように、本暇的な時間を「個からシェア（還元）へ」という

ひとつの可能性として捉えると、仕事の時間をシナジー化することが難しい人には、「楽しむこと」を軸として、個人のための時間を誰かとシェアすることで、本暇の時間に変えていくという方向性があるのでないだろうか。楽器ひとつを例にとっても、ひとりで楽器を弾いても充分自分の楽しみにはなるが、他者に教えたり他人に聴

いてもらったりすることで、本暇的時間のありかたになり得る。知識や経験を自分のなかにただ貯めこんでいくのではなく、社会へ還元していくのである。そのようなつながりが、ひいては自らの資本にもなっていく。今回の事例では、「農民オーケストラ」が、まさにこれにあてはまるのではないだろうか。

「自分の したいこと」を どう見つけるか

このように、私たちは、本暇の時間を何パターンかの「公と私のシナジー」が得られた状態として捉える可能性を見出してきた。では、それらの実現のためには何が必要なのか。

ひとことと言えば、「自分のしたいことを見極める」ということではないだろうか。若い頃から自分のしたいことを作る必要性は、本特集でも鼎談「日本人は上手にヒマを作れるか？」にて各参加者が語っていたことであり、加藤秀俊氏の「隠居のつとめ」で描かれた大名たちも、若い頃からの素養を隠居後の人生に活かし、ひいては社会のために貢献する「つとめ」を果たしていたわけである。

以下、自分のしたいことを見極め、本暇の時間を得るための具体的な取り組みとして、編集部から3つの提案をしたい。

取り組み

一、 感性を研ぎ 澄ませる こと

例えば、鼎談で重要性が見えてきた「歩く」こと、そして読書を、編集部としては勧めたい。歩くことは、自らの感性を研ぎ澄ませ、本場に必要ない情報を能動的に抽出できる状態をつくり出す。このことによる発見は非常に多く、いつもとは違う駅で降りて歩くだけでも、思わぬ気づきがあるはずだ。読書も、無制限に流れ込む情報を受け身で取り込むのではなく、自分のしたいことを発見するための能動的なインプットには有益な方法と言える。

取り組み

二、 「個」の確立

これも鼎談で指摘されていたことであるが、集団に依存せず「個」を確立し、それを大切にして過ごさなければ、自分のしたいことも見つからず、本暇の時間を得ることも困難かもしれない。義務的な仕事や受け身で得た情報に動

かされている状態では、とても自分のためにより時間の使いかたができているとは言えないだろう。

取り組み

三、 評価軸の 転換

場合によっては、自分の評価軸を見直してみることも必要だろう。社会的な地位や金銭という公的な基準だけではなく、自分だけの大切なものを見つけたら、生きがいを見出したりといった視点の転換が重要である。これまでの評価軸（＝無意識に囚われていた枠組み）から自由になることで、自ら「公と私のシナジー」にあてはまる状態を認識できる例もあるかもしれない。

こうして本特集を通して、余暇を超えた「本暇」の時間とはいかなるものか、そのありようを探り、確立するための道筋をも考察してみた。仕事＋休暇、公＋私、社会的義務＋個人的楽しみ、といった各要因がもたらすシナジーとしての本暇の時間が拡大した社会は、個人の幸せと社会の安定が両立した、おそらく、今よりもいっそう人びとの満足度の高い世界になるのではないだろうか。

「公と私のシナジー」を得ることが、
余暇を本暇の時間に転換していくための
手掛かりになるかもしれない。